

ESAO (European Society for Artificial Organs) 49th Annual Congress

東京大学医学部附属病院心臓外科

小野 稔

Minoru ONO



2023年8月29日から9月1日まで、第49回ESAO (European Society for Artificial Organs) 学術集会へ参加してきた。今回はIFAO (International Federation for Artificial Organs) との合同開催であったため、2025年に日本での開催が決定しているIFAOの大会長としての視察を兼ねての参加であった。開催地はイタリアのベルガモであった。ベルガモは人口約12万人の中規模都市であり、市内に小さな空港を有しているが、ベルガモ空港に降り立つまでに3回の乗り継ぎが必要で、交通が非常に不便であった。どうしたものかとイタリアの地図やガイドブックを眺めていると、ミラノ・マルペンサ空港から鉄道で行くことができることに気がついた。調べてみると2時間弱の乗車時間であった。

さて、マルペンサ空港からミラノ中心地のポルタ・ガリバルディ駅までの快速電車は、車内もきれいで快適であった。ベルガモに行くには、そこでローカル線に乗り換える必要があった。車両のあちらこちらに落書きされているローカル線に乗ってガタガタと向かった。赤い屋根のいかにもイタリアらしい家並みや木々の中を走り抜け、日頃の慌ただしさをふと忘れさせてくれるひと時を過ごすことができた。ベルガモは中世から栄えた都市で、駅を降りて目抜き通りを北に向かって歩き始めると、細い路地に所狭しと立ち並ぶ歴史の趣のある建物とともに、ベルガモ・アルタと呼ばれる丘陵地が見えてきた。ESAOの会場はこの一角にあるベルガモ大学のキャンパスである。坂を上ること20分あまり、古びた教会のような建物が見えてきた。何だろうと中を覗いてみると、ここが開催会場であった(図1)。

今回のESAOはベルガモ大学とMario Negri研究所、ベ

ルガモ病院、ミラノ工科大学による共同主催であった。会場となったベルガモ大学の校舎は15世紀に建てられたもので、もとはSant'Agostino修道院であったそうである。メインの講堂に入ると、左右の壁にフレスコ画と思われる、かなり擦り切れたたくさんの絵画が描かれていた(図2)。講堂の正面はいまだに祭壇の面影を残していて、荘厳な雰囲気の中で聴講することができた。奥に入ると一般会場が3つあったが、中庭を取り囲むように建てられた回廊形式の元修道院の建物を改装したものであった(図3)。

ESAOのプログラムは以前から臨床研究の発表が少ないという傾向であったが、今回はさらに少ない印象を受けた。プレナリー講演は5つあり、テーマは携帯型人工臓臓、異種臓器移植、循環器・呼吸器補助デバイス、透析腎代替療



図1 会場の入口の表示

■ 著者連絡先

東京大学医学部附属病院心臓外科
(〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1)
Email: Minoruono61@gmail.com



図2 フレスコ画が描かれているメイン会場

法、欧州における新たな医療機器規制についてであった。日本人工臓器学会 (JSAO) と異なり、腎代替療法についての発表が多く見られた。

人工心臓関連の演題は、ポンプデザインやモニタリングについての発表が多く、人工知能をどのように安全性担保のために組み込むかという取り組みが見られた。COVID-19流行前には、日本からのESAO参加者は30人以上はいたようであるが、今回の参加者は半減して20人に満たなかったようである。IFAOとの合同開催という形式とは裏腹にIFAOとの合同セッションは全くなく、欧州以外の演者による発表は一般演題に組み込まれていたようである。



図3 中庭を囲むように建てられた校舎を背景にして

JSAOとIFAOの合同学術集会は、2025年11月19日から22日にかけて千葉・舞浜で開催される。JSAOの西中知博会長とアイデアを持ち寄って、「日本の学術集会では、海外からの参加者におもてなしと細部にわたる企画力の秀逸さを堪能してもらえるような内容にしていきたい」と決意を固めた学会参加であった。

本稿の著者には規定されたCOIはない。